いろいろな形で楽しめる！

オペラ早わかり

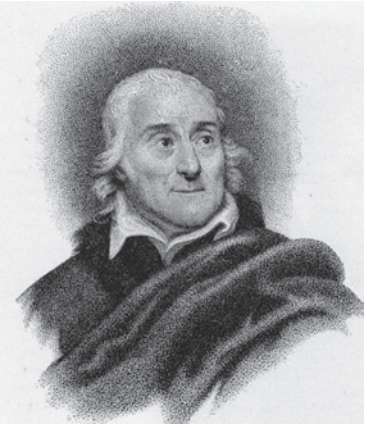
昨年の「能舞とベートーヴェン」公演。
今年はモーツァルトのオペラと能舞がコラボする

1 フィガロの結婚
Le nozze di Figaro

1807 年、フィガロのコスチュームデザイン

モーツァルトが生まれ故郷のザルツブルクを離れ、ウィーンで精力的に活動していた1786年の作品。ボーマルシェの原作に基づいてロレンツォ・ダ・ポンテが台本を手掛けた。ロッシーニが歌劇にした『セビリアの理髪師』のその後のお話。幸せな結婚をしたアルマヴィーヴァ伯爵夫妻だが、ふたりの関係は冷え、伯爵は従者フィガロの花嫁となるスザンナを手に入れようと画策中だ。それを阻止したい知恵者のフィガロ、そして女どうしの結束から一計を案じる伯爵夫人とスザンナを中心に、恋に恋する小姓ケルビーノらが加わって、てんやわんやの一日が繰り広げられる。

今回の公演では、落語家の桂米團治が伯爵を演じ、物語を紡いでいく。彼がフィガロではなく、伯爵目線に立つ理由を考えてみると、この作品のいろいろな側面が見えてくるのではなかろうか。



イタリアの詩人・台本作家ロレンツォ・ダ・ポンテ

H24 5/4（金・祝）20:10　音楽堂邦楽ホール
C31 5/5（土・祝）10:00　音楽堂コンサートホール

2 ドン・ジョヴァンニ
Don Giovanni

『フィガロの結婚』の成功を受けて、翌1787年にプラハで初演された。台本は同じくダ・ポンテによる。さまざまな劇や小説の題材となった、スペインの伝説の女たらし「ドン・ファン」をオペラ化したもの。ある夜、ドン・ジョヴァンニが騎士長の娘ドンナ・アンナを誘惑していたところ、騒ぎが起きて騎士長を殺してしまう。しかし彼は懲りずに、従者レポレロを連れて女たらしの道を突き進む。復讐を誓うドンナ・アンナと許婚、何度捨てられてもドン・ジョヴァンニをあきらめないドンナ・エルヴィーラの3人が彼を追い詰めようとするも不発に終わり、この不遜が永遠に続くかと思われたその時、騎士長の霊が現れてドン・ジョヴァンニを地獄へ落とす。

今回はこのオペラから珠玉のアリアが歌われる。豪華な歌手陣が難易度の高い曲にどう挑むか注目だ。

マックス・スレーフォークトが描いた
「ドン・ジョヴァンニ」

H11 5/3（木・祝）11:20
音楽堂邦楽ホール

3 コシ・ファン・トゥッテ
Così fan tutte

ダ・ポンテの台本による三部作の最後の作品で、1790年に初演された。青年ふたりが自分の恋人の貞操を試す賭けをすることになる。彼らは出征することになったと嘘をついて出発し、別人に扮装してあらわれ、相方の恋人を熱く口説き始める。最初は拒絶する女性陣だが、手を替え品を替えて求愛されるうちに陥落してしまう。落胆する青年たちを老哲学者は「女はみんなこうしたもの（コシ・ファン・トゥッテ）」と諭す。何とも不埒なお話だが、モーツァルトの極上の音楽によって、人間の真実が垣間見える作品となっている。

聴きどころは二組の男女、老哲学者と女中の計6人の声の性格がそれぞれに異なり、独唱に加えてさまざまな組み合わせの重唱が次々と展開されるところ。声楽の魅力にどっぷりと浸りたい。

A13 5/3（木・祝）16:50
金沢市アートホール

※ C00 H00 A00 などは公演番号です。

モーツァルトの

今年の音楽祭はモーツァルトの歌劇（オペラ）５作品を体験できることが目玉の一つ。音楽祭の性格上、全曲演奏ではないけれど、各作品の魅力が伝わるように工夫されているので、初めての人や長い作品は疲れるという人も気軽に楽しめる。

文=潮 博恵（音楽ジャーナリスト）

4 魔笛 *Die Zauberflöte*

最晩年の1791年に書いた最後のオペラ。友人の俳優兼歌手兼興行師であるエマヌエル・シカネーダーの台本による。大蛇に追われたことがきっかけで、王子タミーノは夜の女王の娘パミーナに一目惚れする。彼は聖人ザラストロの下にいる彼女を求め、鳥刺しのパパゲーノと旅に立つ。ザラストロの神殿では数々の試練を課されるが、無事乗り越えてタミーノはパミーナと、パパゲーノは恋人のパパゲーナと結ばれる。一見単純なお話だが、悪役の夜の女王と善人ザラストロの対比が相対的であることや、端正な王子よりも自らの欲望に正直な鳥刺しのほうが幸せそうに見える点など奥が深い。

今回はオペラに定評のあるＯＥＫの初代常任指揮者・天沼裕子が同楽団を指揮、アマデウス役の俳優も加わった天沼版を披露する。

C24 5/4（金・祝）18:40 音楽堂コンサートホール

パパゲーノを演じる俳優・興行主のエマヌエル・シカネーダー

5 皇帝ティートの慈悲 *La clemenza di Tito*

『魔笛』と同じ 1791 年、レオポルト２世の戴冠式で上演するために 18 日間という短い期間で書き上げられた作品。皇帝ティートの妃の座を狙っているヴィテッリアは、彼が別の女性を選んだと思い込んで怒り、自分に思いを寄せるセストに皇帝暗殺をそそのかす。皇帝の友人でもあるセストは苦悩するものの、ヴィテッリアへの愛から宮殿に火を放つ。しかし皇帝は彼女を妃に選んでいたのだった。難を逃れた皇帝を前にして、セストは事情を語らない。その妹セルヴィーリアの願いも空しくセストに罪が言い渡されようとしていた時、ヴィテッリアが罪を告白、皇帝はすべてを赦して、人々は寛大な皇帝を称える。

毎年楽しみにしている人が多い、金沢名物の能舞とのコラボレーション。オペラに挑戦する今年は、登場人物それぞれの心理や苦悩がどう表現されるかに注目だ。

神聖ローマ帝国の皇帝レオポルト２世

H21 5/4（金・祝）11:30 音楽堂邦楽ホール

知っておきたい♪ オペラ豆知識

オペラ・セリア

「セリア」は英語だと「シリアス」、まじめなオペラという意味。17～18世紀の貴族社会で発展した神話や歴史上の英雄を題材にしたオペラ。

例▼皇帝ティートの慈悲

オペラ・ブッファ

近代的な市民が誕生する時代に発展した喜劇的なオペラ。オペラ・セリアに対峙する位置づけからブッファ（滑稽なオペラ）と分類された。

例▼フィガロの結婚、ドン・ジョヴァンニ、コシ・ファン・トゥッテ

ジングシュピール

イタリア語のオペラが当時のグローバルな存在だとすると、いわばローカルなドイツ語による歌芝居。台詞で劇が進行する。

例▼魔笛